

第41号 通巻8巻第6号

1988年11月1日発行

守山市立埋蔵文化財センター

☎ 0775-85-4397

〒 524-02

守山市服部町2250番地

はじめに

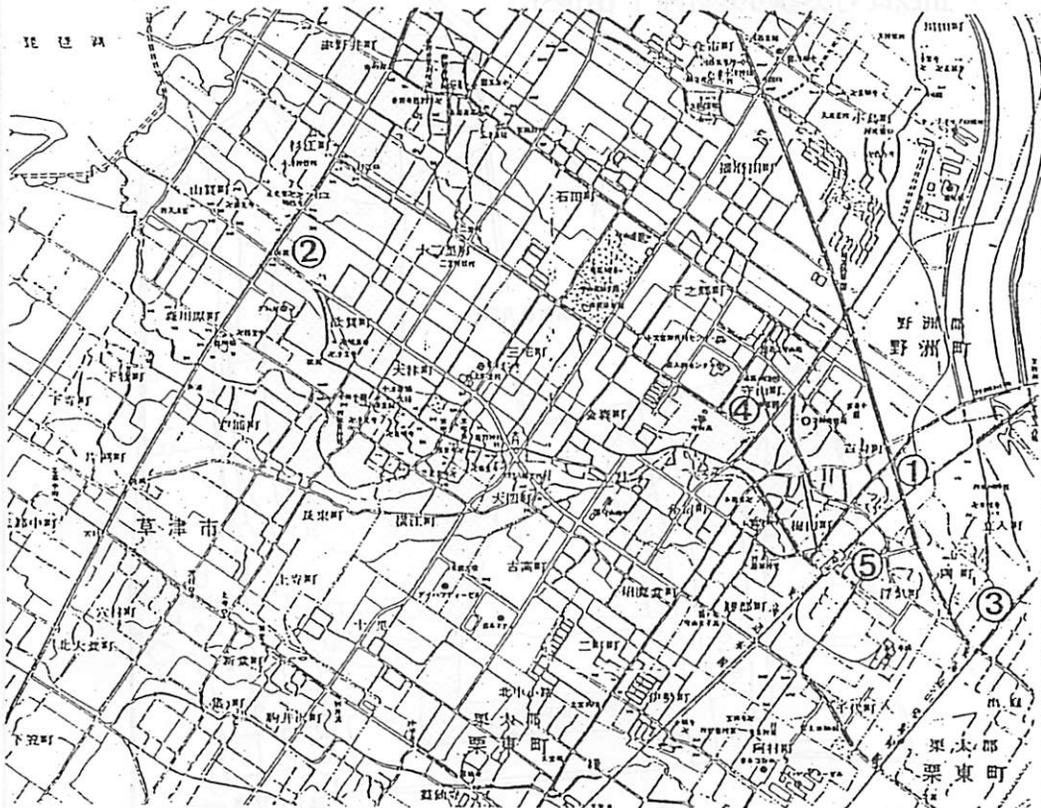
埋蔵文化財センターでは、市内の発掘調査で得た貴重な成果を、広く市民の皆様^{みなさま}に理解していただくための仕事を行っています。その一環として11月3日(祝)から秋季特別展を開催しますが、その準備に忙しい毎日を送っています。

それでは、9~10月の発掘調査の動向とセンターの話題をお伝えします。

発掘調査の成果

今号でお伝えする発掘調査は、^{けいすいざいさ}益須寺遺跡、^{さきえひがし}杉江東遺跡、^{あらかさ}荒牧遺跡、^{よしみし}吉身西遺跡、^{よしみなな}吉身南遺跡の調査です。

調査遺跡位置図



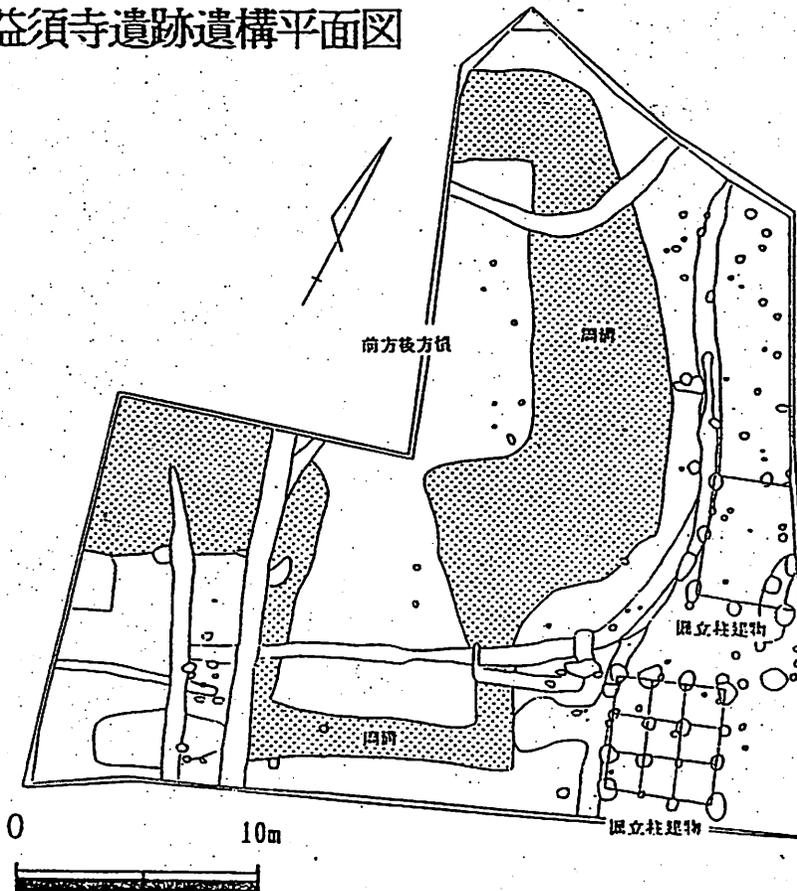
- 【調査遺跡名】(所在地) 1 益須寺遺跡(吉身町) 2 杉江東遺跡(欲賀町)
 3 荒牧遺跡(立入町) 4 吉身西遺跡(守山町) 5 吉身南遺跡(浮気町)

1 益須寺遺跡の調査

マンション建設に伴い8月から約1600㎡を対象に調査を実施している益須寺遺跡で、日本最古級の前方後方墳が発見された。古墳の全長は23.7m、後方部幅14m、後方部長13.4m、前方部幅9m、前方部長10.3mの大きさである。廻りに掘られた周溝は後方部で幅4m、深さ1m、前方部で幅2m、深さ0.5mで、後方部から前方部にかけて狭く、浅くなる。墳丘の盛土は後世の削平のためかなく、主体部（埋葬した穴）も確認できなかった。周溝内からは少量の土器片が出土していて、そのうち溝底近くで見つかった甕や高杯から、この古墳の年代は3世紀後半頃と推定される。県内では前方後方墳は過去5例が報告されている。今回のものは周溝も深く残存状態は極めて良いといえ、弥生時代から古墳時代への墓制の変遷を考えるうえで重要な資料といえよう。

その他に6世紀初頃の土塼2基や7世紀末頃の掘立柱建物跡2棟を検出している。建物跡は1棟が3間×3間の倉庫跡、もう1棟が2間×1間以上の住居と考えられる。これらの建物は日本書紀持統天皇9年の条にその名がみられる益須寺に関連すると考えられ興味深い。

益須寺遺跡遺構平面図



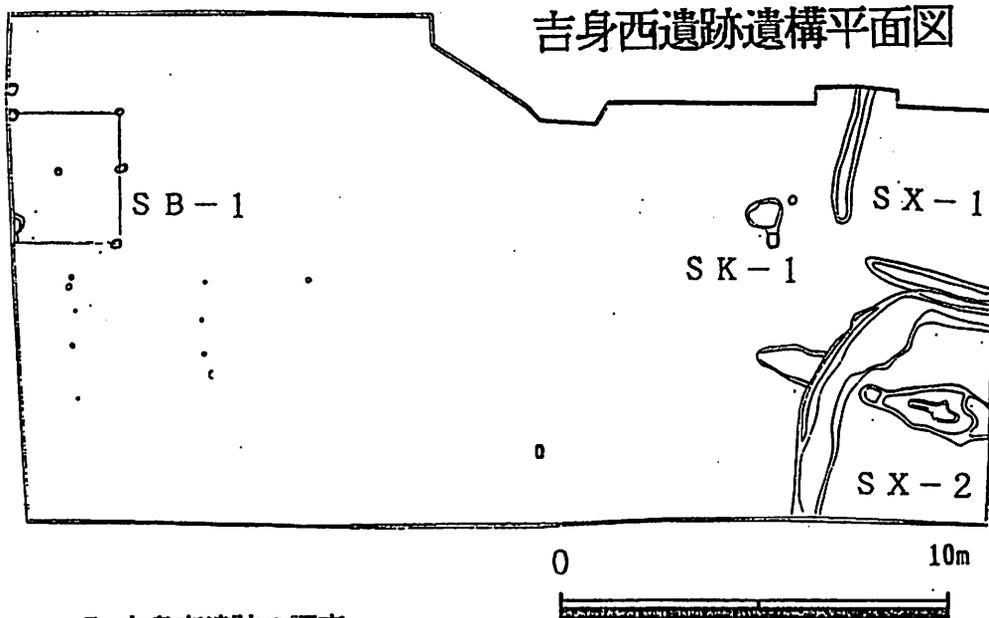
人間の手で掘られたのは確実だが、目的がはっきりしない。このような大きい溝が3~4本も交錯して掘り込まれている。また、このうちの1つから縄文時代後期の土器や石器が出土していて、この一帯に縄文時代の生活跡があると思われる。

この調査地は野洲川堤防から約20mほどしか離れていないのに、氾濫や砂利層がなく、長い間安定した土地であったことが各時代の生活跡から分かった。

4 吉身西遺跡の調査

個人住宅建設に先立ち、9月7日から27日の期間、約700m²を対象に発掘調査を実施した。調査地は、区画整理のすんだ水田で、守山警察署から南へ約100mの地点にあたる。既往の調査地により縄文~古墳時代の集落、墓域であることが分かっている。特に、弥生時代の方形周溝墓は南北方向に約200mにわたり、整然と2列に築造されていて、今回の調査でその南端の様相が判明するものと期待された。

調査地の北東側でその方形周溝墓を2基(SX-1, 2)検出した。1と2は溝を共有していて、土層の堆積状況から1の後、2が造られたことが分かった。1、2の溝底からは、弥生時代中期後半の蓋、水差し、筒椀、鉢などの供献土器がほぼ完全な状態で出土した。また、南西側では、掘立柱建物(SH-1)がみつきり、出土遺物から平安時代の建物と考えられる。土壙(SK-1)からは多量の焼土塊や炭に混じって、若干の縄文土器が出土した。



5 吉身南遺跡の調査

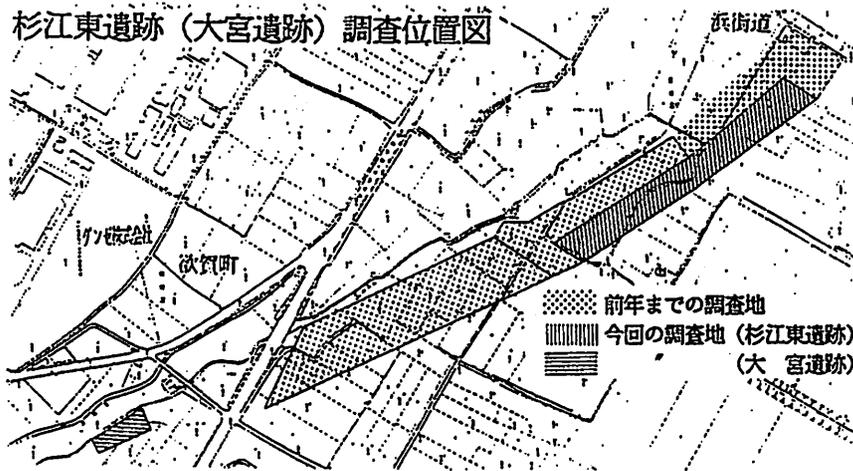
今回の発掘調査は、位置図にも示すとおりJR守山駅東口周辺地に当たる浮気町字中ノ町300-25番地に所在する。調査はマンション建設に先立って、9月19日

2 杉江東・大宮遺跡の調査

守山川改修工事に伴う調査は、昭和61年度調査に隣接した右岸側の2400㎡（杉江東遺跡）と県道山賀・守山甲線より上流の左岸側約600㎡（大宮遺跡）を対象に、9月16日より着手した。過去2ヶ年の同事業に係る調査では、奈良時代の溝、鎌倉時代の掘立柱建物と区画溝を検出している。鎌倉時代の集落は計画的で、大規模なものであることが分かっている。

杉江東遺跡では、調査地を9区に分け、下流側の区域より掘削を開始した。耕土直下は淡褐色土が堆積していて、土師器が少数ながら出土している。この土層はほぼ水平に堆積することと出土遺物に時期幅があることから、地形的に低いところに客土した層と考えられる。さらに掘削を進めると、青灰色粘土を地山とする溝を検出した。前回調査の旧河道に続く溝と考えられる。遺物は土師器、黒色土器などが出土する。

杉江東遺跡（大宮遺跡）調査位置図



3 荒牧遺跡の調査

立入町の東端部、新幹線の高架下で8月から調査を実施している。現在、約3000㎡を発掘していて、古墳時代前期から鎌倉時代の生活跡が確認されている。

まず、古墳時代の生活跡には竪穴住居跡があり、現在までに5棟がみつかっていて、小さな住居は一辺が3.5mの正方形で、屋根を支える柱は四本、東隅には貯蔵用の穴がある。他の4棟はいずれも新しい時代の溝で壊されていて、大きさは不明瞭である。同じ古墳時代の遺構としては、1辺約15mの方墳跡がある。2基みつかっていて、6世紀初めの古墳である。死者が葬られた盛土部分は既に削られ残っていない。この古墳跡と関係しないが、埴輪片が多数出土していて、近くに大きな古墳があったと考えられる。

その他に平安時代の終わりから鎌倉時代にかけて掘り込まれた大きな溝が調査区の中を縦断している。溝幅2～4m、深さ1mと大きく、深いU字状であり、

より10月20日までの期間、約 1,700m²を対象に実施した。

この駅東口一帯はかつての煉瓦工場跡地を再開発して、徐々にマンションや店舗が建設されつつある地域であり、そのため既往の調査も多く、今回が7例目に当たる。一方、JR琵琶湖線以北に隣接する吉身北遺跡でも、駅前という環境のため8例の調査を実施している。その結果、今までに吉身南遺跡で46棟以上、吉身北遺跡で53棟以上の竪穴住居が検出され、線路以南、以北の吉身南・北遺跡が一つとなる大規模な集落であったことが分かっている。5世紀末から6世紀代のおよそ一世紀あまりの期間、古代の人々が連綿と営んだムラである。

さて、今回の調査ではピット3穴、土壙2基を検出した。僅かながら土器が出土し、それから古墳時代後期の遺構であることが分かる。調査地は煉瓦の粘土採取のため地山の多くが既に失われていたが、そのことを差し引いても遺構は希薄な状況であった。調査地が古墳時代後期のムラのはずれ（東辺）にあたり、ムラは径300mくらいの広さをもつものと考えられる。

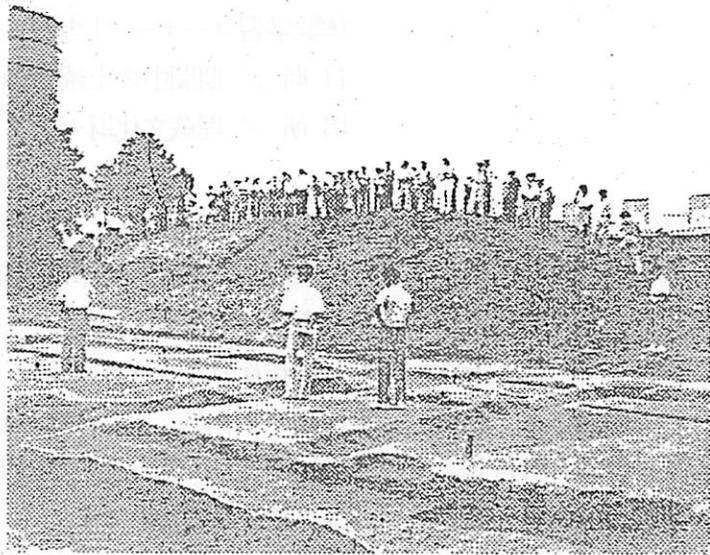
益須寺遺跡現地説明会の開催



2ページでも報告している益須寺遺跡の現地説明会が去る9月15日(土)に開催されました。県内6例目、全国的にも希少な前方後方墳が守山市内で見つかった反響は大きく、約140名の見学者がありました。

見学者は、掘った土でこしらえた高台から前方後方墳を見ながら、約30分間の説明に聴き入っていました。調査説明の後は、細かい質問をしたり、写真撮影するなど、思い思いの見学を約1時間程楽しみ、説明会は無事終了しました。

直に見聞きすることは、テレビの映像や新聞などの写真では味わえない感動をもたらすことを再確認した次第です。これからも、できるかぎり現地説明会という形で遺跡発掘調査の成果を報告していきたいと考えています。



(写真は説明会の様子)

秋季特別展 『古墳と埴輪』 開催のお知らせ

奈良県・藤ノ木古墳では発掘調査によって、石棺のなかから数々の副葬品が見つかっています。このことにより知られざる古代社会の解明が飛躍的に進歩するものと人々の注目を集めています。

さて、今回の特別展はこの古墳時代を取り上げ、「古墳と埴輪」のテーマで下記のとおり開催します。守山市内の発掘調査でも、多くの古墳が見つかっていて、古墳をとりまいていた埴輪や供献品が出土しています。その成果を展示し、古墳の実像を探っていきたいと思います。

なお、11月13日(日)には講演会「古墳とまつり～奈良・四條古墳から～」や、土曜日の午後、日曜日、祝日には“火おこし”に挑戦する体験学習コーナーを開催します。是非、御来館下さい。

記

- | | |
|---------|--|
| 1 開催の期間 | 昭和63年11月 3日(木)から11月27日まで
(開館時間 午前9時～午後4時、期間中無休) |
| 2 開催の場所 | 守山市立埋蔵文化財センター
(近江鉄道バス埋蔵文化財センター行き終点下車) |
| 3 開催行事 | 講演会 「古墳とまつり～奈良・四條古墳から～」
講師 / 奈良県立橿原考古学研究所 西藤 清秀氏
日時 / 11月13日・午後2時～4時
場所 / 埋蔵文化財センター2階会議室
体験学習コーナー 「火おこし」
日時 / 期間中の土曜日の午後、日曜日、祝日
場所 / 埋蔵文化財センターホール横 |

【後 記】 当センターの機関紙名「乙貞」は、服部遺跡の発掘調査で出土した銅印に刻まれていた文字に由来しています。銅印は昭和50年、条里溝より発見され、奈良時代末期の時期が考えられます。

「続日本紀」に、近江に深いかかわりのある“藤原弟貞”という人物が登場します。“弟貞”と“乙貞”、字は違いますが、この人物が近江の野洲郡つまり服部辺りに荘園を所有し、その際に私印として使っていたのでしょうか？ちなみに印字部約 3.3cm角、高さ約 1.2cm、重さは約75g です。

当センター玄関横に、文化財シンボルマーク、同じく服部遺跡出土の埴輪とともにこの銅印のレプリカが建てられていますので、御来館の折り、ご覧下さい。